

司会をつとめた者としては、十分議論の内容を深めていくような進行ができなかった力不足を、参加していただいた皆さんにお詫びしたい。ただ、当日塚田孝氏から「なぜこのような活動が可能になったのか」という視点での活動の総括こそが必要なのではないのか、との発言があったが、企画した側が用意した論点や議論の中身にも色々々と反省すべき点があったように思われる。紙幅がないので一点に絞って私見を述べよう。

すなわち、当日の三報告いずれもが主要な論点として提出し、また筆者も含め関係者が繰り返し強調してきた論点でもある「史料をめぐる市民と歴史研究者との意識のギャップ」という問題についてである。われわれが被災地で活動を進めるなかでこのギャップの問題を頻繁に、また生々しく感じたのは事実であり、ギャップの存在とその重大性を今でも否定するつもりはない。しかしながら、このことをあまりに強調し、一面化していなかったか、と思うのである。

例えば、所蔵者自身が史料を捨ててしまったケースが多かったことにわれわれはかなりショックを受けたが、他方で、「捨てた」という事実自体の中身をていねいに吟味する必要があるし、「捨てた」という事実から市民の歴史意識をストレートに一般化することにも問題があるのではないか。実際、史料を捨てた状況や要因にはさまざまなケースがあったし(寺田匡宏「被災地の歴史意識と震災体験」『歴史科学』146, 1996年)、「捨てた」と言ってもどんな史料を捨てたのかははっきりしないケースも実は少なくない。

また、そのことと関わって、巡回調査などの場でわれわれが「史料」とはどんなものであるのかを説明するのにたいへん苦慮した、という事実についても、市民にわかりやすく説明する言葉自体にわれわれが貧困であった、との反省に結びつけられて、歴史研究と市民の接点の不十分さとして語られることもあった。しかし、「史料」とは何で、それを保存することにどのような意味があるかについて、初対面の、しかも歴史の専門家ではない市民に即座に説明できると考える方にむしろ無理があるのではないか。「古文書」といえばよいのか「文化財」かそれとも「古いもの」と言うのがよいのか、現場で種々悩んだこと、そのことの意味は決して軽くはないと考えるが、うまく説明する言葉がなかなか見当たらなかったことから、あまり性急に

歴史学の限界を云々するのも問題であろう。

また、われわれが直面したギャップは、日常予想していたものよりも確かに大きなものであったけれども、歴史的に見れば、それは少しずつは埋まってきているとも見ることができよう。大国氏のコメントが、戦後の宝塚地域における歴史資料調査の展開を具体的に検討するなかで指摘したように、1970年代の自治体史編纂事業に伴う、広範囲でかなりの程度網羅的な調査のあったことが、われわれが地域に入って被災史料調査を進める上では大きな意味を持った。そうした自治体史の問題点や限界を今われわれが指摘するのはたやすいことかもしれない。しかし、阪神間のはほぼ全ての自治体でこうした編纂事業と調査が行われていたことは、当然のことながら、在地の史料を用いてその地域の住民の歴史を明らかにすることを重要な学問的課題として定置していった戦後の歴史学の発展なしには考えられまい。捨てたケースも少なくなかったが、巡回調査などで直接話をした市民の多くは、こうした地域の史料を残すことが大事なのだというわれわれの主張に同意してくれたと言ってよいと思う。そのように考えれば、当たり前のことかもしれないが、地域の史料を使って民衆の歴史を明らかにすることが歴史学の主要な課題の一つであり、そのことが歴史を専門にはやらない市民の間でもほぼ常識になってきている、という条件があってこそ、今回のような大規模で継続的な地域史料の救出・掘り起こし活動は可能になった、という点をもっと評価してもよいのではないだろうか。

こうして、なぜ可能になったのか、という視点で考えてみると、われわれの運動の意味や可能性、またそこから何を引き出し、発展させるのか、について今まで議論していたのとはやや違った点や局面も見えてくるように今の私には思われる。そこで、30年くらいの長い目で見ると研究を進め、発展させてゆくことによって、被災史料を残したことの意味がより深いところで明らかになるはず、という趣旨の鈴木良氏の発言の重要性が留意されねばならない。われわれは目前のギャップを直視するだけでなく、住民とのさまざまな共同作業や被災地での地域史研究の息の長い深化・発展を通じて、歴史や史料そのものとそれをめぐる意識の共有に少しずつ近づいていくことが可能なのであろう。